

Title	『四つの署名』におけるオリエントの誘惑
Author	田中, 孝信
Citation	人文研究. 59 卷, p.98-110.
Issue Date	2008-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	塩出彰教授：湯川良三教授：細井克彦教授：市川美香子教授：広瀬千一教授：浅岡宣彦教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

『四つの署名』におけるオリエントの誘惑

田中孝信

1890年代、帝国主義の高まりの反作用として「逆植民地化の不安」が生じる。植民地から本国への侵略の物語とセポイの反乱の物語から成るコナン・ドイルの『四つの署名』（1890）も、そうした不安を表わした小説の一つだ。確かに最終的に安定は取り戻される。しかし、その背後にイギリス人の支配者としてのイデオロギーを揺さぶる曖昧さが隠されている。植民地の商品はいギリス人の身体に〈異質なもの〉となって侵入し、国家のアイデンティティをも危険に晒す。イギリス人男性は、帝国との係わりを通して、弱体化した身体や野蛮性を露わにする。〈異質なもの〉に魅せられつつもそれを制御するホームズにしても、彼の帯びる二面性に着目すれば、理想の男性像とは相容れない、不安を喚起する要素を孕む。もはやイギリス性を保持するのは困難となる。それどころかドイルも読者も、身体や国家の完全性への脅威を感じつつも、曖昧さにスリリングな快感を覚え魅せられるのである。

1 逆侵略の恐怖と商品

スティーヴン・D・アレイタは、「逆植民地化の不安」を論じた論文のなかで、そうした不安を表わしたヴィクトリア朝後期の小説の例として、ストーカーの『ドラキュラ』（1897）の他に、ハガードの『彼女』（1887）、キプリングの『消えた光』（1891）、ウェルズの『タイム・マシン』（1895）と『宇宙戦争』（1908）とともに、コナン・ドイルの『四つの署名』（1890）を挙げている。それらの作品のなかでは、「恐ろしい逆転が生じる」のである。

植民者は被植民者の立場にある自分を見出す。搾取者は被搾取者へ、加害者は被害者へと変化する。そのような恐怖は、国家が人種的、道徳的、精神的な衰退に陥っていて、より活力を有する、より「原始的な」民族からの攻撃を誘発しているという認識と結びついている。(623)

確かに『四つの署名』には、植民地からの侵略が、ベンガル湾の東側に浮かぶアンダマン諸島に住む、ドイルが当時の一般的な認識に従い未開の食人種として描き出すトンガ（Tonga）による白人への攻撃となって語られる。¹⁾そしてそれを誘発する、帰還した脱獄囚ジョナサン・スモール（Jonathan Small）の過去が、「セポイの反乱」（1857-59）を背景とした物語のなかに書き込まれる。この反乱は、カンパールの大虐殺に見られるように本国のイギリス大衆に

気の遠くなるような恐怖心を与え、それまでのインド人を文明の高みに引き上げることは可能だとする考えを捨てさせる契機となる出来事だった。以降インドは「迷信と暴力から成る不変の模様」に囚われ、支配できこそすれ、よりよい方向に変えることは必ずしも可能ではない」(Brantlinger 200) 場所と定義されることになったのである。したがって、セポイの反乱の物語を基盤に据えた、植民地からの侵略物語という形態は、植民地および本国における「原始的」民族への恐怖という二重の意味での恐怖を読者に印象づけるのに効果的だったと言える。セポイの反乱の恐怖を喚起することで、食人種のプロットの効果が高まる。植民地世界で起こった一連の出来事が引き続き、ロンドンで起こる殺人事件に影響を投げかけているのである。

囚人の帰還と異人種の出現によって非日常化された帝国の首都ロンドンを舞台に、彼らを撃退せんとするのがホームズである。非ヨーロッパ世界からイギリスに持ち込まれた犯罪によってイギリスは一時的に汚染されるが、ホームズが事件の真相を解き明かすことによって、汚れは取り除かれ、イギリスはその清浄さを取り戻す。正木恒夫はこうした構図を、「ヨーロッパ人が非ヨーロッパ世界を訪れ、その地の『蛮人』を抹殺するか、または文明＝キリスト教化を通じて彼らは無害化する」(236)という冒険小説の国内版と位置づける。ジョン・トンプソンは、小説の謎はセポイの反乱時の殺人に根ざすとし、謎の解決によって「ホームズは、セポイの反乱が表象するオリエントの恐怖を飼い慣らし、同時にインドにおけるイギリスの帝国主義を正当化できる」(72)と述べる。その過程で強調されるのは、ホームズの帯びる明敏さ・順応力・勇気といったアングロ・サクソン人種の英雄的資質なのである。

本論では、そうした本国・文明対植民地・野蛮という二項対立を前提としながらも、単に支配者と被支配者との立場の逆転の可能性だけでなく、植民地から本国への商品の移動、およびそれに伴うイギリス人の生活様式の変化という点に目を向けたい。イギリスは、文明化の象徴として、例えば、清潔さや白のイメージを帯びる石鹼を植民地に輸出する。アン・マクリントックによれば、「ヴィクトリア朝の洗濯の儀式は、イギリスの進化論上の優位を示す神が与えた印として、地球規模で売り歩かれた。そして石鹼は、魔力を帯びた物神だったのである」(207)。しかし同時に、植民地からも商品は本国に流入し、イギリス人の生活に影響を及ぼす。同時期に出版されたワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』(1891)の阿片の場合と同じように、『四つの署名』においてドイルは、コカインやタバコといった植民地の商品に魅せられるイギリス人男性を描き出す。そこに、人類学や医学関連の雑誌・旅行記・民族誌を通して科学的に人種差別を正当化しようとするイギリス人の、植民地に対するアンビヴァレントな態度が窺えないだろうか。さらに、〈異質なもの〉としての商品の侵入は、イギリス人としてのアイデンティティばかりか、フーコーが『監獄の誕生』(1975)で述べる社会的・政治的な秩序としての「政治的な身体」という概念に着目すれば、国家のアイデンティティを揺るがす危険性すら秘める。このとき、帝国主義の高まりとともに声高に叫ばれるようになった、理想の兵士像に体现される健全さや活力といったようなイギリス人男性の「男らしさ」は、どのような変

化を来たすのだろうか。そうした点を探究することで、〈異質なもの〉の侵略とホームズによる駆逐という一見堅固なステレオタイプのなテキストに孕まれた流動性を明らかにしてゆきたい。

2 オリエントの誘惑

作品はホームズがコカインを注射する場面が始まり、事件解決後再びコカインを注射する場面で終わる。冒頭、ワトスンが事細かに語る麻薬摂取の様子は注目に値する。

シャーロック・ホームズはマントルピースの片隅から瓶を取り上げ、格好のよいモロッコ革のケースから皮下注射器を取り出した。そして、力強い白く長い指先で細い注射針を整え、左手のワイシャツの袖をたくし上げた。彼はおびただしい数の注射針の跡が点々と残る筋肉質の前腕と手首に、しばらくじっと視線を落とした。やがて鋭い針先を一気に突き刺し、小さな内筒をぐっと押し下げると、満足げに長い溜息をついてピロード張りの肘掛け椅子に身を沈めた。(5)

前作『緋色の研究』(1887)第1章でホームズは、異なる物質が融合したときの反応に著しい関心を示していた。そうした関心が今や、エロティックな響きをはっきりと帯びて、自らの身体への〈異質なもの〉の侵入に向けられる。ここに描き出されたセクシュアリティは、単に受動的でもなく攻撃的でもない、その両方なのである。彼は、注射針を刺すという攻撃的な立場と同時に、自らの体内にコカインを受け入れるという受動的な立場も取ることで、快楽を二重の意味で味わう。しかも、そのコカインが常に慎重に調合された「7パーセントの溶液」(6)であることから、彼が快楽に無節制に身を任せるのではなく、快楽を制御しようとしていることが分かる。

この場面のもう一つの重要性は、ホームズの自慰行為を見るワトスンがいるということだ。医者と記録者という二つの役割を担う彼の存在は、イギリスという中心と、南アメリカ原産のコカから採ったコカインという商品が表わす周縁との関係が孕む二面性を浮き彫りにする。医者としての彼は、ホームズの身体内部で「組織変化が進んで、永続的な衰弱に陥る」危険性を指摘する。「単なるひとときの快楽のために、なぜ自分に与えられたその偉大な才能を危険に晒したりするのかね？」(6)と問うとき、ワトスは、コカインによって得られる快楽が高い代償を支払うことになりかねないことを非難するのである。

しかし、医者としてのワトスンが明確な抗議の姿勢を示すのとは裏腹に、記録者としての彼はこの場面に魅せられている。記録者ワトスは、ホームズが注射を打とうとしているのを知っているながら、打ち終わるまで異を唱えようとはしない。彼がホームズを見つめるとき、「じっ

と視線を落として」いるのはホームズとワトソンの二人の男性であり、ワトソンは暗黙のうちに自分自身をホームズに重ね合わせる。ホームズのために心配するだけでなく、その光景を見ることで自ら快感を覚えていると解釈できる。これは、この作品のなかで後に数多く見られる、植民地からの侵略に対する矛盾した反応の最初のものとなる。そして、そうした反応は、身体と国家の結びつきを反映して、そのままイギリスという国家の組織体の反応にもつながってゆくのである。

ホームズが、ワトソンの言う体質的な退化、この時期に直接関係のある用語を用いれば、デカダンスの危険に晒されながらも、快樂の刺激を求めるためにコカインを服用するのは、世紀末のロンドンでの平凡な日常生活から逃れるためである。それを実証するかのごとくに、作品中には何度も「平凡な (commonplace)」という言葉が出てくる。

「だからコカインをやっているというわけだ。僕は頭脳を使っていないと、生きていけないんだ。他にどんな生きがいがあるというのかね？ この窓のところに立ってみたまえ。これほど暗くて惨めで、無益な世の中がかつてあっただろうか？ 黄色い霧が渦を巻きながら通りを漂い、くすんだ家々を越して流れて行くのを見てごらん。これほど救いがたく散文的で世俗的なものが他にあるだろうか？ 才能があっても、君、その才能を生かす場所がなければ、宝の持ち腐れだよ。犯罪も平凡だし、生存も平凡となれば、才能だって平凡なものしかお呼びではないということさ」(12)

こうした「平凡なもの」に対するホームズの嘆きは、私立探偵としての彼を刺激する興味深い仕事ベイカー街221Bの彼の部屋に舞い込んできたとき、すぐさま止む。それは、平凡な日常から彼を救い出してくれる一種のゲーム感覚の戦いと位置づけられる。だが、謎の解明とともに再び倦怠感が襲ってきたとき、以前の嘆きとコカイン摂取は、再び繰り返されることになる。ホームズは殺人「事件 (case)」の解決の後に、もう一つの“case”、すなわち「格好のよいモロッコ革のケース」に手を伸ばすわけである。依頼人メアリ・モースタン (Mary Morstan) によって導入されたロマンティックな犯人追跡劇は、彼が自らの身体を危険に晒して行なう言わば実験と呼べるものを中断させる代替物であり、それが終わってしまったとき、ホームズ、記録者ワトソン、それに、ホームズの不満を共有し彼の物語を貪るように読んだ都市の中産階級読者は、無味乾燥なロンドンへの〈異質なもの〉の次なる侵略を待たねばならない。ホームズは、「四つの署名 (the sign of the four)」から「前腕の印 (the signs on his forearm)」へと戻って行くのである。

ホームズは体内に注入されたコカインがもたらす快感を味わうと同時に、それを制御することに自己陶酔的な喜びを見出すわけだが、過度に外国の物に溺れてしまうのがサディアス・ショルトー (Thaddeus Sholto) である。モースタン嬢を伴って、彼女への手紙の差出人サディア

スを訪れたホームズとワトスンが玄関でまず出会うのは、「黄色いターバンを巻き、白くゆったりとした服に黄色の帯を結んだ」(23)ヒンズー教徒の召使である。彼の出現に驚いたワトスンは、「郊外の三流住宅のありふれた戸口にはめ込まれた、この東洋人の姿は、何かひどく不釣り合いな印象を与えた」(23)と語る。トンガの侵入以前にすでにイギリスは、人をも含めた商品の移動によって〈異質なもの〉を内包しており、それが今表出したに過ぎない。そして、ココインのプロット同様、ロンドン郊外の一見平凡な家屋においても「日常」と「非日常」とが鋭く対立するのである。いやそれどころか、イギリスとオリエントとの境界が溶解する可能性すら秘めている。大都市における不調和なものの並置というのは、後のエリオットの『荒地』(1922)に見られるようにモダニズム詩学の主たる特徴であるわけだが、ホームズ物語においてもロンドンが、探検し、地図を作り、征服し、解説すべき空間であり、単なる背景にとどまらず、他の謎を強める働きを持ったテキスト上の謎と言える。

サディアスは、インド人の召使以上に「何かひどく不釣り合い」で、グロテスクなイギリス人男性として登場する。

まばゆい黄色の光が射し、その光の中央に、頭の先の尖った、小柄な男の姿があった。頭の周りにはかたい赤毛が生え、その真ん中から、てかてかと光った頭皮が突き出していた。……男は、両手をよじりながら立っていたが、笑ったかと思うと、しかめ面をするという具合に、顔面は絶えず痙攣を起こし、一時もじっとしていなかった。(24)

水ギセルで東洋のタバコを吸う彼は、ホームズとは対照的に、その習慣に耽溺し身体に異常を来たす。ホームズは7パーセント溶液を注意深く計量し、麻薬による快楽を意志の力に従わせることができた。それに対してサディアスは、ワトスンの言う「永続的な衰弱」の恐怖を喚起する。「潤んだ青い目を弱々しくまばたかせ」(25)「甲高い声で絶え間なくしゃべり続ける」(32)彼は、イギリス人男性が帯びるべき雄々しさとは無縁な、オリエントの商品によって女性化された姿すら晒す。彼のこうした退化の原因が、かつてインド軍にいた父親ショルトー少佐(Major John Sholto)が横領したアグラの財宝を遺産として受け継ぎ、結果として中産階級の尊ぶ労働・規律・節制といった価値観から逸脱したせいであることを考えれば、帝国主義的支配は、イギリス人に利益のみならず損失をももたらすことが分かる。

オリエント化されるのは、サディアスの身体だけではない。彼が閉じこもる部屋は、イギリス中産階級の避難所としての家庭空間のなかに、オリエントがいかに浸透しているかを示す格好の例である。サディアスは「南ロンドンという荒涼たる砂漠のなか」にある貧弱な屋敷のなかの一室に、東洋の奢侈品から成る「芸術のオアシス」(24)を構築する。タバコ同様、そこはロンドンの「粗野な物質主義」(26)に対する堡壘として機能する。

贅沢の限りを尽くした、豪華絢爛たるカーテンやつづれ織りが壁を飾り、それがあちこちで紐で留められ、その間から立派な額に入った絵や東洋の花瓶が覗いていた。琥珀色と黒に織り込まれた絨毯は、分厚く柔らかくて、足は苔を敷き詰めた上を歩いているように心地よく沈んだ。床に斜めに置かれた二枚の大きな虎の皮が、隅の敷物の上に置かれた大きな水ギセルとともに、東洋的な豪華さをいっそう盛り立てていた。鳩の形をした銀製の香炉が、目に見えないほどの細い金の糸で、部屋の中央に掛けてあった。香が燃えると、かぐわしい上品な香りが部屋を満たした。(24-25)

ここではオリエントが官能性と融合していることは明らかだ。サディアスが「香り高い東洋のタバコ」(26)を吸うとき、その煙は彼のみならず、その場に居合わせるホームズ、ワトスン、モースタン嬢の身体にも侵入し、彼らをもオリエント化の危険に晒す。さらに、「豪華絢爛たるカーテンやつづれ織り」、「分厚く柔らかい絨毯、そして「大きな虎の皮」といった商品とイギリス人の肌が接触するとき、後者は前者にエロティックに包み込まれさえる。オリエントはもはや安全な距離を保って審美的に眺められるものではない。ワトスンの魅入られたような語りは、作品冒頭でホームズがコカインを打つ様子に対するワトスンの反応を想起させる。しかしこの誘惑は、サディアスの身体に象徴されるように、植民地への屈服をもたらす危険を孕んでいるために、拒絶されねばならない。それに対して、タバコの煙を吸引することで身体内部からオリエント化したサディアスは、さまざまなオリエントの装飾品との接触によって身体外部からもオリエントに飲み込まれた人物と定義できるのである。家庭空間へのオリエントの侵入は「唇の振れた男」(1901)でも描かれ、オリエントの要素とイギリスの要素は奇妙に融合し、渾然一体化してくることになる。³⁾

サディアスがホームズたちを連れて行く、彼の兄バーソロミュー (Bartholomew Sholto) の住むボンディチェリ荘は、その名からしてインド東海岸の港町を想起させる。インドの都市にちなんで命名するというのは、征服した都市にイギリスの名前をつけるという帝国主義の典型的な行為を逆転させたものである。ロンドン郊外にインドが構築されるのである。植民地はロンドンにまで浸透し、帝国主義が保つはずの距離はなくなる。

そこで起こる毒矢によるバーソロミュー殺害は、コカインや東洋のタバコといった〈異質なもの〉が単に潜在的な危険性を帯びるのではなく、死をももたらすものであることを暗示する。それが分かっておればこそ、ゲーム感覚でこの事件を楽しんでいたはずの冷徹で理性的なホームズが、矢について「ぞっとするものだよ」、「マーティーニ銃弾を相手にする方がまだましだね」(54)と述べて嫌悪の情を露わにする。毒矢は、イギリス人のアイデンティティを揺るがす域にとどまらず、イギリス人を滅ぼすのである。それは、身体と国家との相関関係からして、イギリスの危機ともなる。この殺人の与えた衝撃がいかに大きいかを物語るように、ワトスンは自分自身と読者を安心させるために、「暗く野蛮な事件」をあくまでインドの都市名を冠し

た異質な空間で起こったものと見なそうとする。そして、モースタン嬢の住むフォレスター夫人 (Mrs. Cecil Forrester) の屋敷について、「私たちを飲み込んだ、暗く野蛮な事件の最中であって、イギリスの静かな家庭を、ほんのひとつきでも垣間見られることは、何と心温まることだったろうか」(51)と述べて、イギリスの家庭が持つ闇夜を照らす灯台の役割や文明の象徴としての存在意義を強調するのである。

パーソロミュ-殺害の犯人がトンガであることは、明らかに支配者に対する被支配者の逆襲と読み取れる。ホームズは、コカインの瓶をマントルの上に置いているように、人類学の本を腕を伸ばせば届く範囲に置いている。「ホームズは腕を伸ばして、棚から分厚い本を取り出した」(68)。彼が人類学関係の知識を収集しているのは、一つには、コカイン摂取の場合と同様、平凡な日常から非日常へ夢想や想像を通して逃避するためだと考えられる。だが今や彼は、実際に異人種と対峙しなければならない。後にスモールはセポイの反乱の惨劇について「ひと月の間、インドはどこから見たって、サリー州やケント州と同じく静かで平和だったのさ。それが翌月になると、何と20万もの黒い悪魔たちが一斉に解き放たれ、インド全体がまるで地獄のようになっちゃった」(98)と語って、混沌としたインドと平和なイギリスの風景とを比較しているが、トンガのイギリス本国への侵入という観点から眺めれば、イギリスにも殺人犯である悪魔のようなトンガが何十万も解き放たれるかもしれないのである。そのとき、ワトソンの賛美するイギリスの家庭空間ももはや安全とは言えなくなる。麻薬と同じく野蛮な食人種は、潜在的に個々のイギリス人の身体にとって危険な存在であり、彼の脅威は、イギリス人を侵略者たる彼の食物にしてしまうということなのだ。確かに、東洋のタバコが、退化したサディアスの身体に見られるように、内からその奴隷となった彼を支配し、身体を独立した調和の取れた統一体から不調和へと導き、寄生物と母体との関係を逆転させるのに対して、食人種は対象物を外から飲み込むことによって破壊する。しかし、食人種を被支配者ゆえに帝国という枠組みのなかで消費される商品だと見なせば、彼の逆襲は、帝国を内から食べ尽くしてゆくのではないかというイギリス人の恐怖、元来消費される側であったものによる消費する側の消費を表わしているとも捉えることができる。

トンガは常に抑圧しておかねばならない危険な存在である。だがホームズは、コカインのプロット同様、食人種のプロットにおいても、抵抗しがたいほどの心地よい戦慄を覚える。征服するかされるか、そして食人種をコカイン同様商品と見なせば、消費するかされるか、という不確定さに魅せられるのである。トンガの存在は、ホームズにとって、単調な都市生活から救い出してくれるロマンティックな気晴らしとなる。いやそればかりかトンガは、ホームズが冒険を通して強い意志力と支配力を誇示する機会を提供してくれる必要悪でもあるのだ。麻薬によって得られる「ひとときの快樂」がそうであるように、ホームズは、この食人種の脅威によって彼の「偉大な天分」をさらに発展させる。現実の日常生活においてはと言わないまでも、イデオロギーの上で身体と国家への最大の脅威だった食人種は、彼が脅かした人々や文化が再び

自己主張するのに必要なのである。イギリス人の退化への恐怖と、帝国主義の罪悪感を薄め、自分たちが植民地で言っている暴力と攻撃を被植民者たる他者の欲望として映し出したいという、意識的もしくは無意識の願望、この二つが作り出したと考えられる逆侵略の主題を通して、ドイルは、冒険小説の舞台となる植民地においてイギリスの再生産がなされたように、ロンドンにおいて国家のアイデンティティを再生産するのである。

したがって最終的には安定がもたらされる。その意味で語りは、国内の安全を揺り動かす脅威を導入しつつも、公式化された「平凡な」枠組みを用いていると言える。ただ最終的な安定空間において、決して外国のものが全面的に否定されているわけではない。最終的にスモールが捕まり、トンガが拳銃という近代兵器によって殺害されたことで、〈異質のもの〉は排除されたかに見えるが、ホームズは常に〈異質のもの〉を求めているのであって、再びコカインに帰るところから、〈異質なものを〉適度に取り入れ制御することの必要性に重点が置かれていることが分かる。作品は、ホームズが慎重に調合するコカインに見られるように、「永続的な衰弱」に陥る危険のない、適度な「ひとときの快樂」を追い求めるのだ。

3 不安定化する「男らしさ」

こうした、一見安定したかに見える構図が秘める〈異質なもの〉への憧れという不安定さは、作品中のイギリス人男性が帯びる曖昧さに通じるものである。サディアスが女性化したのみならず、片足をなくしたスモールは、自らの軍人としての男性性の喪失を強く意識する。「残った足に木の義足をつけて、足を引きずって退院したときにゃ、傷病兵ってえんで軍隊はお払い箱さ」(97)。強い白人男性として優越した地位から転落した彼は、その分、人種間の支配と被支配の逆転に敏感になる。アンダマン囚人収容所では「白人いじめの大好きな、黒い顔をした看守に小突き回され」(96)、セポイの反乱では「何と20万人もの黒い悪魔たちが一斉に解き放たれ、インド全体がまるで地獄のようになっちまった……何百という黒い悪魔が、まだ英国の赤い軍服を着たままで、燃え上がる家の周りを、踊ったりわめいたりしているのが見えやした」(98-99)と、彼はホームズに捕まった後に語る。また、ワトスンが傷を受けたのは前作では肩であったにもかかわらず、この作品では「ジーザイル銃弾で撃たれた」「傷ついた足」(7)となっており、スモール同様去勢を想起させる。ファレルの用語を使うならば、二人は「周縁の男」(37)なのだ。男性としてのアイディティティが揺らいでいるのが分かる。ドイルがワトスンの傷を正確に描写しなかったことで、かえって白人男性の男性性が問題として浮き上がってくるのである。

白人男性同士の結びつきも問題を含んでいる。アグラの財宝のショルトー少佐による不法な取得の背後に我々は帝国主義の悪を読み取るわけだが、それは白人間の僚友関係を破壊する。トンガが帝国主義の言説に則り、進化上の先祖返りを遂げた、文明化の不可能な、多起源説を

是とするような人種的他者として描かれているのは確かだが、白人であるにもかかわらず囚人ゆえに中心世界から追放されたスモールは、この野蛮人との間に曖昧な関係を構築する。たとえ彼がトンガをフリークとして市の見世物に供することで商品化したとしても、両者の間には主従関係とはいえ信頼が存する。それは、スモールが「四つの署名」をした三人のシーク教徒を裏切らないのと同じである。この異人種間の僚友関係に比べて、ショルトー少佐は長年の親友である、メアリの父モースタン大尉 (Captain Arthur Morstan) を、アグラの財宝を独り占めするためにいとも簡単に裏切る。オリエントの財宝という〈異質なもの〉が、イギリス人の潜め持つ、彼らが^{オリエンタル}東洋人に付与したはずの「下劣さ」を表出させる触媒としての役割を担うのである。ショルトー少佐の行為は、中産階級の「リスペクタビリティ」が実は密かな犯罪行為にかかっているのではないかという疑念すら生じさせる。もしトンガがイギリス人に食人種として展示されるのなら、それは、異人種や白人の同胞を搾取する白人男性のカニバリズムを偽り隠すためなのである。帝国主義によって支配者は、彼らが野蛮と見なす被支配者に似通ってくる。それを象徴するかのよう、「ベイカー街不正規隊」を構成する「12人のぼろを身に着けた、薄汚れた小さな浮浪児たち (street Arabs) 」(67) は、トンガと何ら変わらない、文明のなかの野蛮なのである。商品や犯罪という形での〈異質なもの〉の侵入は、いわゆる優れた文明と言われるものが孕む矛盾を暴露し、イギリスによる植民地統治のイデオロギー上の正当性を突き崩す。ロンドンを流れるテムズ河がイギリスの河であると同時に、トンガの死体やアグラの財宝を飲み込んだ、オリエントにも通ずる帝国の河であるのと同じように、イギリス人のなかにも、彼らが自己の正当化を図るために悪魔化した他者は隠されているのである。頑迷な愛国主義者ドイルのなかにも、帝国主義への二面的態度が窺える。

ドイルだけではない。二面的態度は、財宝を取り返しにイギリスにやって来たインド人を描いたコリンズの『月長石』(1868) 以降、繰り返し見られるものである。しかし、『四つの署名』の際立った特徴は、虚弱化したイギリス人男性のなかに、あらゆる他者をあくまで制御できるホームズを作り出した点にある。確かに、事件を解決するに際して英雄的行為を発揮する彼には、後期ヴィクトリア朝の人々が理想とする「男らしさ」が備わっている。19世紀が経過するにつれて、「男らしさ」の意味に明らかな変化が生じた。すなわちそれは、「道徳的粘り強さ、キリスト教的な男らしさといった理想から、断固として肉体的なものの信奉への変化であり、まじめな熱心さから強壮な精力への、誠実さから堅固さへの、敬虔さやよき教えについての理想から清潔な男らしさと礼儀正しきの理想への」(Hyam 72) 変化だった。この傾向を帯びるホームズは、「感情的な特質は明晰な推理をできなくする」(17) と明言していることから分かるように、当時人々にもっとも容赦なく非難された性質、感傷趣味と性的抑制の欠如とは無縁な男性として表わされるのである。彼を見つめるワトソンの眼差しは、憧れの男性に対して男性自身が放つものと解釈できる。ローラ・マルヴィによれば、男性が他の男性を凝視するとき、それは二つの目的を持つ。まず一つは、「相手をエロティックな対象として見ることで快感」

を覚えるという窃視症的な意味合い、もう一つは、「自我リビドー……同一化の過程」(815)というナルシズム的な意味合いである。後者の場合、見る男性は見られる男性に、象徴的存在としての男根、ジェンダー化によって男性に付与された権力を重ね合わせる。したがって見られる男性の身体は、ナルシズム的であると同時に規範ともなる。「男性の光景」は、特にそこに英雄的行為が見られたとき、家父長制秩序の正当性を誇示するのである。ワトソンの眼差しはまさにこうした解釈に適うものであり、ホームズの働きが、本国に安寧をもたらす。

しかしながら、そもそも理想の男性像として描き出されているはずのホームズ自身が二面性を帯びているのではないだろうか。合理主義者でありながら、ヴァイオリンへの関心が音楽を芸術の極致と見なすペイターを喚起するように、審美家。行動派でありながら、平凡な日常ゆえに無気力感に襲われ、コカインによる夢に逃避する抑うつ症者。行動派としての肯定的な価値自体も、ワトソンが「彼の動作は、よく訓練された警察犬が臭跡を嗅ぎ回るときのように、すばやく、音もなく、目立たなかった。それを見て私は、彼がもし法を守るためではなく、逆に法を破るためにその精力と知力を使ったら、恐ろしい犯罪者になるだろうと思った」(44)と述べているように、悪に容易に転じる。その意味でホームズは不安を喚起する、善悪の境界を侵犯する可能性を秘めた存在と言える。さらに、捜査段階で彼が示す卓越した変装能力もまた、不安材料である。変幻自在なホームズは、彼をよく知る者すらも驚愕させ困惑させる、人知を超越した存在となる。老船乗りに変装したホームズについてジョーンズ警部 (Athelney Jones) は、「役者にだってなれますな、それも名優だ」(78)と感嘆する。変装は、個としての主体が抱く流動化願望の表われであり、瞬間瞬間に価値を置き存在の多様性を重視する点は、デカダントの性癖と一致する。ホームズの結婚に対する態度にしても、理想の男性像としての彼に疑念を生じさせる。結末部でワトソンがホームズに伝える近い将来のモースタン嬢との結婚は、E. K. セジウィックの用語を使えば、異性愛的な男性同士の社会的な強い絆、すなわちホモソーシャリティを強め、男性支配体制の維持に貢献するわけだが、ホームズはあくまでベイカー街221Bの下宿に男だけの空間を構築し自己愛に浸る。女性嫌悪という点ではホームズは、ホモソーシャルな関係を持つ男性と共通するのだが、異性愛を排除する姿勢は、ホモセクシュアルな欲望への接近の可能性を完全には拭い切れない以上、父権社会にとって潜在的な危険を伴うのである。要するに、彼の像はさまざまな形で異質な要素を孕んでおり、だからこそ、彼は植民地の商品や異人種に遭遇した際、共鳴し楽しむことができるのである。

4 消滅する境界

以上述べてきたように、『四つの署名』には本国対植民地といった一見堅固な二項対立の下に、イギリス人の支配者としてのイデオロギーを揺さぶる曖昧さが隠されている。植民地から流入する商品はイギリス人の身体に〈異質なもの〉となって侵入し、国家自体のアイデンティ

ティをも危険に晒す。帝国主義の高まりとともに中産階級にとり強力で普遍的な道德規範と化した男性性崇拜にしても、有能な植民者や忍耐強く高潔な兵士といった理想像とは裏腹に、現実のイギリス人男性は、帝国との係わりを通して、弱体化した身体や野蛮性を露わにする。彼ら自身のなかに外国人がいるのだ。確かに最終的にホームズによって秩序と安定は回復される。〈異質なもの〉に魅せられつつも、それを制御し統治する、冷静さと決断力、それに肉体的強さに、ドイルはもちろん読者は、植民地の商品や異人種が氾濫するなか、イギリス人としてのアイデンティティの理想を見出したのである。だが、そのホームズ自身が二面性を帯びている点に目を向ければ、そうした理想が幻想に過ぎないことが分かる。

もはやイギリス性を保持することは困難になる。世紀末、人々の間では、大英帝国を、イギリス本国の文化が植民地の文化を上書きする単一の存在と見なすことは不可能であるという認識が、強まりつつあった。帝国は、個々人から国家に至るまで、また、帝国の前哨地からロンドンの家庭の炉辺に至るまであらゆる段階で、予測すらできないほど多面的アイデンティティを有するものと見なされ出したのである。そして人々は、他者を抑圧し安心するという自己欺瞞的姿勢を放棄し、『四つの署名』に描き込まれた〈異質なもの〉に心地よい戦慄を覚えるホームズを作り出したドイルやその物語を貪るように読んだ読者と同じく、身体や国家の完全性への脅威を感じつつも、他者の侵入にスリリングな快感を見出し魅せられるのである。

【注】

- 1) ドイルはアンダマン諸島の原住民について「いま刊行中の地名辞典の第一巻」(68)からの引用として、以下のように記している。

生まれつき見るも恐ろしい。頭は不釣合に大きく、小さくて恐ろしい目を持ち、顔立ちは歪んでいる。しかしながら、手足は驚くほど小さい。非常に気難しく気性が荒いため、イギリス政府の懐柔策はことごとく失敗している。先に石をつけた棒で難破船の生存者の頭を叩き割ったり、毒矢を打ち込んだりするため、常に難破船乗り組み員の恐怖的となっている。この虐殺は、必ず人食い祭りで幕を閉じる。(69)

これは、この諸島を訪れた最初のイギリス人フレデリック・モウアの「アンダマン諸島の住民は地球上でもっとも野蛮な人種の一つであるとこれまでずっと見なされてきた。文明は彼らを飼い慣らすことも、また彼らに近づくことさえ不可能なのである」(3-4)という説明と実に似通っている。モウアはセポイの反乱のさなかに、乱に加わった者たちを収容する囚人流刑地としてこの諸島が適しているかどうか調査するために派遣されたのだった。

また、『四つの署名』と同じ1890年に刊行された『大英百科事典』第9版は、「アンダマン諸島の原住民の風貌は、一般的にヨーロッパ人種にとって、最初は非常に強い嫌悪を引き起こす類のものとされてきた」と述べて、醜貌を認めているが、「しばしば頑丈で強壯である」と肯定的な評価も下している。そして、食人については、「島民による食人の噂はいまだに跡を絶たないが、彼ら自身が全面的に否定しているだけでなく、近年同地で植民地経営に携わった人々は一様にこれを謬説として退ける」と、歯切れが悪いものの否定に傾いている。

次に『大英百科事典』第11版(1910)になると、「アンダマン諸島の男性原住民の外観は、筋骨逞しく見た目がよく、一般的に愛想がいい。若者はしばしば明らかに整った顔立ちをしている」と記し、食

人の慣習については、かつてそうした習慣があったことも疑わしい、としている。20世紀になって、ア
ンダマン諸島の原住民を巡るイギリス人の認識は大きく転換するのである。

- 2) 阿片窟を境とする、イギリス人中産階級男性セント・クレアの乞食と「リスベクタブル」な家庭人との二重生活は、どちらが彼のアイデンティティかを分からなくするほどに融合する。そしてワトソンは、ロンドン郊外にあるセント・クレアの家で一夜を過ごす準備をしているホームズの様子を以下のように描き出す。

彼は……歩き回ってベッドから枕を、そしてソファーや肘掛け椅子からクッションを集めて来た。次に、それらを使って東洋の寝椅子のようなものをこしらえ、その上に胡坐をかいて座り、目の前に1オンス分の粗悪な刻みタバコとマッチ箱を置いた。私はランプの薄暗い光のなかで、ホームズが古びたブライヤーのパイプをくわえ、天井の一隅を放心したように見つめ、そのワシのような厳しく鋭い顔にまばゆい光を浴びて、無言の、身動き一つしない姿から、青い煙の渦を立ち上らせているのを見た。(140-41)

「ワシのような厳しく鋭い顔」をした西洋人であるホームズが吸っているのは阿片ではなく刻みタバコに過ぎないが、その様はオリエントの吸引者のようである。彼がベッドの枕と肘掛け椅子とソファーのクッションから作るのは、「東洋の寝椅子」であり、部屋は郊外住宅の一室でありながら、ワトソンがイースト・エンドの阿片窟で描写した「茶色の阿片の煙がもうもうと立ち込めた部屋」(125)に非常に似通っている。要するに、阿片窟の影響はそのままの形ではないにせよ、阿片やオリエント、それにイースト・エンドとは無関係なイギリスの家庭空間のなかに浸透しているのである。中産階級にとってもっとも神聖なはずの家庭空間が、オリエントとイギリスの両方の特徴を同時に示すのだ。

【引用・参考文献】

- "Andamanese." *Encyclopaedia Britannica*. 9th ed. 1890; 11th ed. 1910.
- Arata, Stephen D. "The Occidental Tourist: *Dracula* and the Anxiety of Reverse Colonization." *Victorian Studies* 33 (1990) : 621-45.
- Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914*. Ithaca and London: Cornell UP, 1988.
- Doyle, Arthur Conan. "The Man with the Twisted Lip." 1891. *The Adventures of Sherlock Holmes*. 1892. Oxford: Oxford UP, 1999. 123-48.
- . *The Sign of Four*. 1890. London: Penguin, 2001.
- Farrell, Kirby. "Heroism, Culture, and Dread in *The Sign of Four*." *Studies in the Novel* 16 (1984) : 32-51.
- Hyam, Ronald. *Empire and Sexuality: The British Experience*. Manchester and New York: Manchester UP, 1990.
- McClintock, Anne. *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest*. New York and London: Routledge, 1995.
- Mouat, Frederick. *The Andaman Islanders*. 1863. Delhi: Mittal, 1979.
- Mulvey, Laura. "Visual Pleasure and Narrative Cinema." *Film Theory and Criticism*. Ed. Gerald Mast. New York: Oxford, 1985. 803-16.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Thompson, Jon. *Fiction, Crime, and Empire: Clues to Modernity and Postmodernism*. Urbana and Chicago: U of Illinois P, 1993.
- ミシェル・フーコー『監獄の誕生——監視と処罰』田村俣訳、新潮社、1977。
- 正木恒夫『植民地幻想』みすず書房、1995。

【2007年9月19日受付、9月28日受理】

Oriental Seduction in *The Sign of Four*

TAKANOBU Tanaka

In the 1890s "the anxiety of reverse colonization" was caused as a counteraction to the rise of imperialism and rendered by many late-Victorian novels. Among them is Conan Doyle's *The Sign of Four* (1890), whose plot merges two subgenres that were popular at that time: the invasion narrative and the Mutiny narrative. It is true that stability is restored at the end, but under it an ambiguity which shakes the ideology of English imperialism is concealed. The heterogeneous such as the oriental commodity or living invades English bodies and exposes the national identity to danger. Englishmen reveal their weakened bodies and savagery through their relation to the Empire. Even Holmes, who can control and dominate the heterogeneous in spite of his fascination with it, has various kinds of two-sidedness that arouse anxiety in readers. He has some elements incompatible with the image of an ideal Englishman. It became difficult to maintain Englishness at the end of the century. Not only that, both Doyle and his readers fell under the charm of and felt thrilling pleasure with ambiguity while they felt the threat to the wholeness of their bodies and nation.